

PCB 廃棄物処理基本計画に基づく取組の進捗状況と今後の課題について

1. PCB 廃棄物処理基本計画上の処理期限

PCB 廃棄物の処理完了に向けては、まだ道半ばであり、PCB 廃棄物処理基本計画に定める処理期限内に、一日も早い処理完了に向けて、関係者が一丸となって、この問題を解決するという確固たる意思を持って、それぞれの責務を果たすことが必要。

(1) 高濃度 PCB 廃棄物

- 当初予定していた平成 28 年 3 月までの処理完了が困難な状況となったこと等を踏まえ、平成 26 年 6 月に PCB 廃棄物処理基本計画が改定され、次の表に掲げるとおり、処理完了期限を延長（※処理完了期限の再延長はしないということが大前提）。

【トランス・コンデンサ】

PCB 処理事業名	計画的処理完了期限
北九州	平成 31 年 3 月 31 日（あと 4 年弱）
大阪	平成 34 年 3 月 31 日（あと 7 年弱）
豊田	平成 35 年 3 月 31 日（あと 8 年弱）
東京	平成 35 年 3 月 31 日（あと 8 年弱）
北海道（室蘭）	平成 35 年 3 月 31 日（あと 8 年弱）

【安定器等・汚染物（小型電気機器の一部を除く）】

PCB 処理事業名	計画的処理完了期限
北九州 （大阪、豊田）	平成 34 年 3 月 31 日（あと 7 年弱）
北海道（室蘭） （東京）	平成 36 年 3 月 31 日（あと 9 年弱）

- 保管事業者は、自ら処分を行う場合を除き、JESCO の各事業に係る計画的処理完了期限までに同社に処分の委託を行うことが必要。使用製品を使用する事業者についても、廃棄物処理法による排出事業者責任に基づき、また、平成 37 年までのポリ塩化ビフェニルの使用の全廃を規定するストックホルム条約を踏まえ、自ら処理を行わない場合は、JESCO の各事業に係る計画的処理完了期限までに同社に処分の委託を行うことが必要。

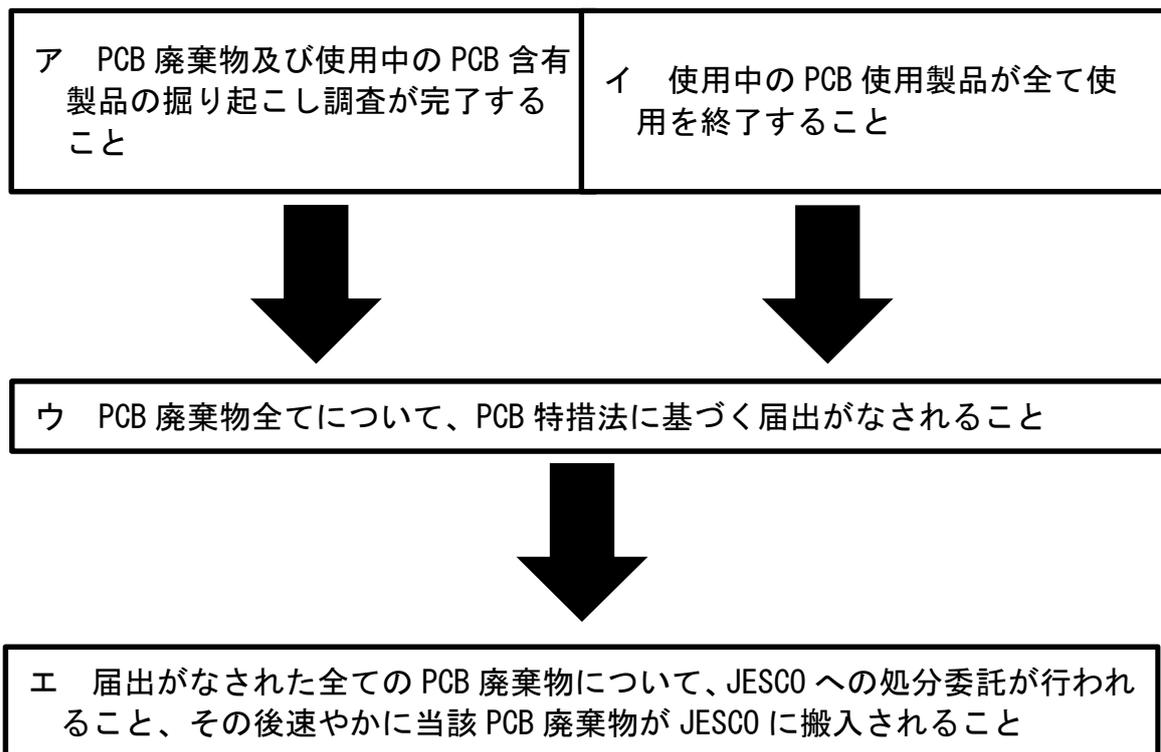
(2) 低濃度 PCB 廃棄物（特に微量 PCB 汚染廃電気機器等）

- PCB 特措法施行令で定める処理期限（平成 39 年 3 月 31 日）までに処理を完了することが必要。

2. 高濃度 PCB 廃棄物に係る基本計画達成の見通し

(1) 基本計画達成に向けたフォローアップ項目について

- 基本計画達成には、計画的処理完了期限内に、次の各項目を全て満たすことが必要。
- 特に、北九州事業エリアにおける計画的処理完了期限が残り約3年半となっていることから、各項目について迅速に対応を進めることが必要。
- このため、各項目それぞれについて重点的にフォローアップを行うことが重要。



(2) 基本計画達成に向けたフォローアップについて

ア PCB 廃棄物及び使用中の PCB 含有製品の掘り起こし調査が完了すること

【主なポイント】

- 掘り起こし調査については、殆どの自治体では今年度以降本格化するが、調査に5年程度要することも考えられることから、計画的処理完了期限までに掘り起こし調査を確実に完了させるための追加的な方策について検討することが必要。

① PCB 廃棄物処理基本計画における主な記載内容

- 第2章第3節2(2) 都道府県市の取組
都道府県市は、必要な調査を行った上で、管内における未処理の使用製品やポリ塩化ビフェニル廃棄物を網羅的に把握することが必要である。このため、事業者に対して使用製品の保有状況を確認するとともに、保管事業者と関係のある事業者団体等を通じて情報収集に努めるものとする。これらの取組においては、国、中間貯蔵・環境安全事業株式会社、電気保安関係等の事業者等と協力して未処理事業者の一覧表を作成し、当該一覧表に掲載された事業者に対し、処理の時期を確認するものとする。
- 第2章第3節2(3) 国の取組
国は都道府県市と連携し、保管事業者及び使用製品を使用する事業者に対する計画的な処理の必要性を周知するとともに、使用中の使用製品やポリ塩化ビフェニル廃棄物の把握に努め、処理の時期の確認を行う。

② これまでの進捗状況

- 平成26年7月に、都道府県市に対し、昨年の基本計画の変更に即して、掘り起こし調査の実施など早期処理に向け、国、JESCO等と協力し、未処理事業者の掘り起こし及び期限内処理に向けた指導・助言を行う必要がある旨を通知。
- 平成26年12月に各都道府県市(47都道府県、66政令市、合計113都道府県市)あてに行ったアンケート調査結果によると、昨年12月時点で、殆どの自治体が調査を今後実施予定と回答。掘り起こし調査は今後、実際には今年度以降、各自治体で本格化する見込み。

表1 掘り起こし調査の実施状況
(平成26年12月時点、調査対象113都道府県市、複数回答あり)

管内の全ての地域で調査を実施した	32自治体
管内の一部の地域で調査を実施した	7自治体
実施予定である	86自治体
現時点では、実施を予定していない	3自治体

- しかしながら、積極的な取組を行っている北九州市においても掘り起こし調査に5年以上要したことを踏まえれば、他の自治体においても掘り起こし調

査の完了までに少なくとも5年を要することも考えられ、北九州 PCB 処理事業の計画的処理完了期限（約3年半後）までに調査が完了しないおそれ。

（参考）北九州市の掘り起こし調査は5年以上かけて実施

- 北九州市においては、調査対象を自治体管内の全ての事業者とし、年度毎に調査対象エリアや調査対象事業者のグループ化を行い、全ての調査を完了するまでに5年を要したところ。
 - 具体的には、北九州市は、平成20年、22年、23年、24年の4ヶ年に渡り、市内の全ての事業場53,616事業場の掘り起こし調査を実施し、高濃度のトランス類76台、高濃度のコンデンサ類136台、安定器46個を発見。これは北九州市内の高濃度PCBトランス、コンデンサの約1割に相当。なお、アンケート調査票の回収率は49%（23,164事業所／53,616事業所）。
 - さらに、平成26年度に総ざらいとして市内の全ての法人約2万法人を対象に掘り起こし調査を行い、トランス類3台、コンデンサ類17台、安定器1,229個（約2.6トン）を発見。この際、これらの他に、PCB含有の疑いのある蛍光灯が1事業場において、約18,350箇所で使用されており、調査にさらに4年程度を要する状況（全てがPCBを含有するわけではない）。
- 平成26年8月には、掘り起こし調査マニュアルを策定し、都道府県市に周知するとともに、これに係る担当者説明会を同年8月に開催。
 - また、平成27年2月に、JESCOの処理施設に係る地元自治体、電気保安関係事業者関係団体、経済産業省及び環境省で構成する「PCB廃棄物早期処理関係者連絡会」を開催し、関係機関が連携し、調査を行っていく認識を共有。

③ 今後の検討課題と対応の方向

- **国と都道府県市との連携による効率的かつ実効性のある掘り起こしに向けた方策の検討**：掘り起こし調査の対象は概念上管内全ての事業者と考えられ、その事業者数は膨大。このため、環境省が策定した掘り起こし調査実施マニュアルにおいては、PCB使用製品保有の蓋然性が高い自家用電気工作物設置者に調査対象を限定。ただし、それであっても全国で約85万事業者が対象。
- **調査対象事業場住所等のデータ整備**：自家用電気工作物設置者の情報は経済産業省から提供されたデータを用いているが、当該データが古いこと、電気工作物の設置場所に係る情報のみが整理されており、事務所の住所が整理されていないことなどから、相当数の調査票が未達となり返送され、調査効率が非常に悪いという問題が一部の自治体から指摘されている状況。
- **アンケート調査の回収率向上のための方策の検討**：アンケート調査票の回収率は、調査対象事業者をどのように設定しても50%程度。回答があったとしても、記載内容には既存の届出の有無やPCB汚染の有無に不明な点があり、戸別訪問等の精査作業が不可欠。さらには、未回答の事業者に対する追跡調査も必要であることから、調査完了までに複数年度を要する状況。

- **使用中の PCB 含有機器に対する掘り起こし調査体制の強化**：PCB 特措法は「廃棄物」に係る法制度であり、同法に基づく都道府県市の権限は PCB 廃棄物に限定されているところ。このため、PCB 含有機器を使用する事業者に対する都道府県市による掘り起こし調査の実施は困難であり、今後対応の強化を図ることが必要。また、JESCO の PCB 処理事業地域ごとに地域版の連絡会を随時開催するなど、今後、経済産業省等の関係機関との連携を一層強化することが必要。

イ 使用中の PCB 使用製品が全て使用を終了すること

【主なポイント】

- PCB 廃棄物の処理期限を過ぎても PCB 使用製品の使用を継続する事業者が相当数残るおそれがあるため、使用中の PCB 含有機器に対し使用停止を求めるための追加的な方策について検討することが必要。

① PCB 廃棄物処理基本計画における主な記載内容

- 第 2 章第 3 節 2 (2) 都道府県市の取組
都道府県市は、使用中の使用製品についても将来処理が必要となることを踏まえ、各地方産業保安監督部等と連絡調整し、対応するものとする
- 第 2 章第 3 節 2 (3) 国の取組
これらの取組においては、使用中の使用製品についても、計画的な処理がなされるよう必要な措置を講ずるものとする
- 第 2 章第 3 節 3 処分を中間貯蔵・環境安全事業株式会社に委託する保管事業者の責務
使用製品を使用する事業者についても、廃棄物処理法による排出事業者責任に基づき、また、平成 37 年までのポリ塩化ビフェニルの使用の全廃を規定するストックホルム条約を踏まえ、自ら処理を行わない場合は、中間貯蔵・環境安全事業株式会社の各事業に係る計画的処理完了期限までに同社に処分の委託を行うことが必要

② これまでの進捗状況

- PCB 使用製品は、昭和 46 年の通産省（当時）の PCB の製造中止、回収等の行政指導以降も、現在まで継続して使用中の機器が数多く存在。計画的処理完了期限前に早急にその使用停止・処理を進めることが必要。
- 使用中の PCB 使用製品の状況を把握するため、PCB 特措法第 8 条の規定による PCB 廃棄物の保管状況等の届出にあっては、同法施行規則に定める様式において、PCB 使用製品の使用状況も記載するよう措置しているところ。
- また、電気事業法に基づき、PCB 含有電気工作物の使用制限や PCB 含有電気工作物の設置者の報告義務等を課しているところ（PCB 濃度にかかわらず）
 - ✓ PCB を含有する電気工作物を電路に設置することを禁止（ただし、現在使用中の機器の使用継続は禁止されていない）【電気設備に関する技術基準を定める省令】
 - ✓ PCB を含有する電気工作物の使用を覚知した際の使用届の提出、廃止した際の廃止届の提出及び漏えい事故時の報告を義務付け【電気関係報告規則】
- 都道府県市においては、行政指導により、PCB 廃棄物の期限内処理を勘案した計画的な使用を PCB 使用製品の使用事業者に促している状況。

- 特に安定器の使用については、平成 12 年に、公共施設における PCB 使用安定器について、平成 13 年度末までにその交換を終える等の安全対策を講じるよう、平成 12 年 11 月の閣議了解に基づき、同年 12 月に厚生省（当時）から都道府県市に周知したところ。しかしながら、未だ使用が継続され破裂事故が生じた事例もあり、平成 26 年 10 月に都道府県市に対し、改めて注意喚起するよう通知したところ。
- PCB 特措法に基づく届出によると、平成 26 年 3 月現在で、トランス類 550 台、コンデンサ類 6,414 台、安定器 94,948 個が使用中。使用機器数は減少傾向にあるが、PCB 廃棄物の処理期限を過ぎても PCB 使用製品の使用を継続する事業者が相当数残るおそれ。

表 2 PCB 使用製品の使用数（PCB 特措法に基づく届出によるもの）
（平成 26 年 3 月現在）

PCB 処理事業名	トランス類	コンデンサ類	安定器
北九州	54 台	980 台	20,828 個
大阪	162 台	1,141 台	18,654 個
豊田	106 台	1,724 台	12,774 個
東京	146 台	1,510 台	22,622 個
北海道（室蘭）	82 台	1,059 台	20,070 個
合計	550 台	6,414 台	94,948 個

備考：

- 1) トランス類は、高濃度に区分された高圧トランス（ネオントランスを除く。）、リアクトル、放電コイル、計器用変成器、整流器、誘導電圧調整器、ラジエーター等が含まれる。
- 2) コンデンサ類は、高濃度に区分された高圧コンデンサ、サージアブソーバー等が含まれる。
- 3) 安定器は、高濃度に区分された安定器が含まれる。
- 4) 低圧トランス及び低圧コンデンサのうち小型のもの、廃 PCB 等、感圧複写紙等上記以外の高濃度 PCB 廃棄物は本表には含まれていない。

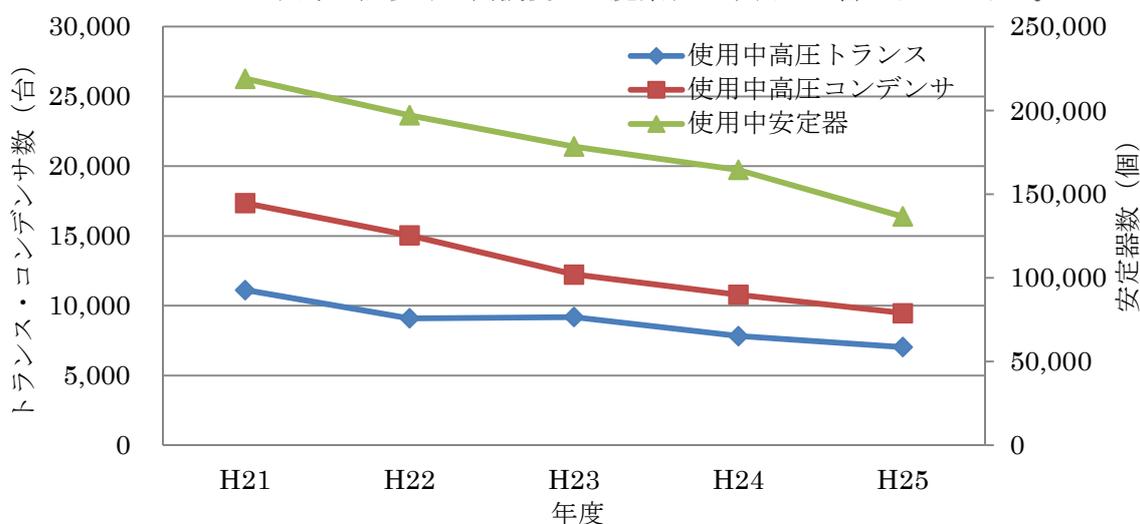


図 1 PCB 使用製品の使用数（PCB 特措法に基づく届出によるもの）

備考 届出のうち、高圧トランス、高圧コンデンサ、安定器のみの使用数であり、平成 24 年度以前の値と比較するため、平成 25 年度については、高濃度 PCB 廃棄物と低濃度 PCB 廃棄物の合算としている。

- また、掘り起し調査の進捗状況にかんがみれば、上記以外に、PCB 特措法に基づく届出がなされていない使用中の PCB 含有機器が相当数存在すると見込まれるところ。

③ 今後の検討課題と対応の方向

- PCB 使用製品に関する掘り起し調査の迅速かつ確実な実施：前述のとおり。
- 使用中の PCB 使用製品を把握するための方策の検討：PCB 特措法に基づく届出においては、使用製品の使用状況を PCB 廃棄物の保管事業者にのみ記載を依頼しているため、例えば、使用中の PCB 使用製品のみを保有する事業者は届出義務の対象外。トランス類・コンデンサ類については電気事業法に基づく届出と PCB 特措法に基づく届出内容を機器 1 台単位で情報の突合をすることで、使用量の把握が一定程度可能と考えられるが、安定器は電気事業法に基づく届出の対象外。
- 使用中の PCB 使用製品の廃止に向けた方策の検討：PCB 使用製品の使用をいつ停止し、いつ廃棄物として排出するかは、使用者の任意に委ねられているところ（※）。使用停止に当たっては製品の買換えが必要となり、代替製品の購入費用と廃棄物の処理費用を要することになるため、PCB 廃棄物の処理期限を過ぎても PCB 使用製品の使用を継続する事業者が存在するおそれ。
 - ※ 事業者は、ポリ塩化ビフェニル廃棄物の処理の体制の整備の状況その他の事情を勘案して政令で定める期間内に、そのポリ塩化ビフェニル廃棄物を自ら処分し、又は処分を他人に委託しなければならない旨、PCB 特措法に規定されているが、使用中のものについては、そのような規定は置かれていない。
- 関係機関の連携の一層の強化：使用中の PCB 使用製品については、都道府県市は行政指導のみで PCB 廃棄物の期限内処理を勘案した計画的な使用を事業者には促している状況であり、対応には限界。PCB 使用製品を使用する事業者の指導等に当たっては、経済産業省や電気保安関係事業者等とも連携した取組が必要であり、平成 27 年 2 月に「PCB 廃棄物早期処理関係者連絡会」を開催し、環境省、経済産業省、関係自治体等が連携し、PCB 使用製品を使用する事業者も含め期限内の廃棄物処理に向けた指導等を行っていく認識を共有したところ。今後、関係機関の連携を一層強化することが必要。
 - ※ PCB 特措法第 13 条に、環境大臣が、PCB 使用製品を使用する事業所管大臣に対し、PCB 使用製品を使用する事業者の協力を得ることが出来るよう必要な措置を講ずることを要請することができる旨の規定がある。

ウ PCB 廃棄物全てについて、PCB 特措法に基づく届出がなされること

【主なポイント】

- PCB 特措法に基づく届出による平成 26 年 3 月現在の未処理の PCB 廃棄物及び使用中の PCB 使用製品の総量は、トランス類 6,322 台、コンデンサ類 118,575 台、安定器 4,701,198 個（9,967 トン）。
- ただし、前述の掘り起し調査の進捗状況を踏まえれば、未だ未届けのものが一定数存在するものと見込まれるところ。
- また、高濃度 PCB 廃棄物であるにもかかわらず、低濃度 PCB 廃棄物として届出がなされているものがあるなど、届出内容の正確性には課題が存在するため、正確な届出がなされるよう、追加的な方策について検討することが必要。

① PCB 廃棄物処理基本計画における主な記載内容

- 第 2 章第 1 節 4 地方公共団体の役割
都道府県市は、国とともに、保管事業者に対し、特別措置法に基づく届出及び期間内の処分に係る義務並びに廃棄物処理法に基づく適正な保管その他の義務に関し、周知徹底を図ることに努める
- 第 3 章第 1 節 1 全国のポリ塩化ビフェニル廃棄物の保管等状況の情報の収集、整理及び公開
国は、全国的なポリ塩化ビフェニル廃棄物の保管及び処分の状況について、国民、地方公共団体その他の関係者に広く情報提供するため、都道府県市に届出された保管及び処分の状況に関する情報を集約し、処分の進捗状況等を分かりやすく提示していくよう努める

② これまでの進捗状況

(PCB 特措法に基づく届出量)

- PCB 特措法第 8 条の規定による届出について、平成 26 年 3 月に届出様式を改正し、高濃度 PCB 廃棄物・低濃度 PCB 廃棄物の区分欄を追加。
- 保管事業者の責務に関する理解の増進のためのパンフレットを作成・頒布。
- 環境省においては、都道府県市に届出された保管等の状況に関する情報を集約し、毎年度、公表しており、平成 26 年 3 月現在の PCB 特措法に基づく届出状況は、未処理の PCB 廃棄物量（届出量合計（保管量＋使用量））は、トランス類 6,322 台、コンデンサ類 118,575 台、安定器 4,701,198 個（9,967 トンに相当）。
- ただし、前述の掘り起し調査の進捗状況を踏まえれば、未だ未届けのものが一定数存在するものと見込まれるところ。
※ 今後、掘り起こし調査の進展により、未届けの PCB 廃棄物量が増加する見込みであるが、前述の北九州市における掘り起し調査の事例を踏まえれば、その量が大幅に増加することはないものと思料される。

表3 高濃度 PCB 廃棄物の届出状況 (平成 26 年 3 月現在)

PCB 処理事業名		トランス類	コンデンサ類	安定器
北九州	A : 保管量	326 台	9,015 台	318,201 個
	B : 使用量	54 台	980 台	20,828 個
	C : 届出量合計 (A + B)	380 台	9,995 台	339,029 個 ※719 トン
大阪	A : 保管量	745 台	25,343 台	895,575 個
	B : 使用量	162 台	1,141 台	18,654 個
	C : 届出量合計 (A + B)	907 台	26,484 台	909,229 個 ※1,928 トン
豊田	A : 保管量	1,252 台	17,578 台	757,824 個
	B : 使用量	106 台	1,724 台	12,774 個
	C : 届出量合計 (A + B)	1,358 台	19,302 台	770,598 個 ※1,634 トン
東京	A : 保管量	2,238 台	38,709 台	1,902,865 個
	B : 使用量	146 台	1,510 台	22,622 個
	C : 届出量合計 (A + B)	2,384 台	40,219 台	1,925,487 個 ※4,082 トン
北海道 (室蘭)	A : 保管量	1,211 台	21,516 台	736,785 個
	B : 使用量	82 台	1,059 台	20,070 個
	C : 届出量合計 (A + B)	1,293 台	22,575 台	756,855 個 ※1,605 トン
合計	A : 保管量	5,772 台	112,161 台	4,606,250 個
	B : 使用量	550 台	6,414 台	94,948 個
	C : 届出量合計 (A + B)	6,322 台	118,575 台	4,701,198 個 ※9,967 トン

備考：

- 1) トランス類は、高濃度に区分された高圧トランス（ネオントランスを除く。）、リアクトル、放電コイル、計器用変成器、整流器、誘導電圧調整器、ラジエーター等が含まれる。
- 2) コンデンサ類は、高濃度に区分された高圧コンデンサ、サージアブソーバー等が含まれる。
- 3) 安定器は、高濃度に区分された安定器が含まれる。
- 4) 低圧トランス及び低圧コンデンサのうち小型のもの、廃 PCB 等、感圧複写紙等上記以外の高濃度 PCB 廃棄物は本表には含まれていない。
- 5) 安定器の届出重量は推計値（※印）。

(届出内容の正確性)

- PCB 特措法に基づく届出内容と、JESCO への登録機器に関する情報と比較すると、本来高濃度 PCB 廃棄物であるにもかかわらず、低濃度 PCB 廃棄物に区分されて届出されているものがあると、JESCO から指摘されているところ。

③ 今後の検討課題と対応の方向

- 掘り起し調査の迅速かつ確実な実施：前述のとおり。
- 高濃度及び低濃度 PCB 廃棄物の実効性のある判別手法・システムの検討：高濃度 PCB 廃棄物は、トランス類、コンデンサ類、安定器に貼り付けられている銘板に記載された型式、種別、性能（安定器の力率）、製造年月等の情報から判別可能。しかしながら、長期の保管により、当該銘板が汚損するなどにより不鮮明なもの、製造業者が既に倒産しているなどにより情報が不足し、高濃度 PCB 廃棄物と確実に判別できないものが存在。このようなものは、高濃度 PCB 廃棄物に情報上合致しないという理由により低濃度 PCB 廃棄物として届出がなされているものもあると考えられるところであり、高濃度 PCB 廃棄物の実効性のある判別手法や一元的なデータ管理システム等の検討が必要。

- エ 届出がなされた全ての PCB 廃棄物について、JESCO への処分委託が行われること、その後速やかに当該 PCB 廃棄物が JESCO に搬入されること

【主なポイント】

- PCB 廃棄物については、都道府県市や JESCO の指摘によれば、PCB 特措法に基づく届出がなされている PCB 廃棄物であっても、JESCO への登録が未だなされていないものが相当数存在。計画的処理完了期限内に一日でも早く JESCO への処分委託が確実に行われるよう、追加的な方策について検討することが必要。
- JESCO に処理委託された PCB 廃棄物の処理は、概ね順調に進んでいるが、今後は、経年劣化に伴うトラブルが増加するおそれがあることから、施設の健全性を継続的に確保することが必要。

① PCB 廃棄物処理基本計画における主な記載内容

- 第 2 章第 3 節 2 (1) 中間貯蔵・環境安全事業株式会社の取組
中間貯蔵・環境安全事業株式会社は、その拠点的広域処理施設において、安全を第一として適正かつ確実な処理を行うこととする・・・今後は特に処理設備の経年的な劣化を考慮し、処理施設の保守点検を計画的かつ確実に行うことが重要である。このため、日常点検及び年一回の定期点検を確実に行うとともに、部品や設備が計画的に更新されるよう各事業ごとに長期設備保全計画を策定し、これらに基づく設備の更新を着実にやっていくこととする・・・都道府県市及び保管事業者と十分な連絡調整を行った上で、計画的な処理を推進するものとする。さらに、処理費用の負担能力が低い保管事業者でも円滑に処理委託ができるよう、分割して処理費用を支払うための仕組みを整える。また、計画的な処理委託を行おうとする保管事業者の状況に配慮しつつ、意図的に処理委託を行わない者に対しては、処理料金が上がることを早期に告知する等により、計画的な処理委託を促進することを検討するものとする
- 第 2 章第 3 節 2 (3) 国の取組
国は、中間貯蔵・環境安全事業株式会社が行う事業の全般を統括し、中間貯蔵・環境安全事業株式会社を指導監督する。具体的には、拠点的広域処理施設における処理が、引き続き安全を第一としつつ計画的に行われるよう中間貯蔵・環境安全事業株式会社を指導監督するとともに、中間貯蔵・環境安全事業株式会社が、事業の実施状況について、地域住民、保管事業者等の関係者とのコミュニケーションを通じ、事業に対するより一層の理解を得ることに努めるよう指導監督する・・・中間貯蔵・環境安全事業株式会社が行う拠点的広域処理施設の補修・点検・更新に対し資金の補助を行うことを通じ、当該処理設備の健全な維持を確保するものとする
- 第 2 章第 3 節 3 処分を中間貯蔵・環境安全事業株式会社に委託する保管事業者の責務
保管事業者は、自ら処分を行う場合を除き、中間貯蔵・環境安全事業株式会社の各事業に係る計画的処理完了期限までに同社に処分の委託を行う必要がある。使用製品を使用する事業者についても、廃棄物処理法による排出事業者責任に基づき、また、平成 37 年までのポリ塩化ビフェニルの使用の全廃を規定するストックホルム条約を踏まえ、自ら処理を行わない場合は、中間貯蔵・環境

安全事業株式会社の各事業に係る計画的処理完了期限までに同社に処分の委託を行うことが必要

- 第2章第6節1 中小企業者等の負担軽減措置

ポリ塩化ビフェニル廃棄物処理基金を国及び都道府県が協調して造成し、中小企業者等が、高圧トランス・コンデンサ等及び安定器等・汚染物の処分を中間貯蔵・環境安全事業株式会社に委託して行う場合に、その処理費用が軽減されるよう、ポリ塩化ビフェニル廃棄物処理基金から処理の主体である中間貯蔵・環境安全事業株式会社に対して中小企業者等の費用負担軽減に要する額を支出することとする。

② これまでの進捗状況

(JESCO への登録)

- PCB 特措法においては、PCB の保管事業者等に対し、政令で定める期間内に（平成 38 年度末までに）、その PCB 廃棄物を自ら処分し、又は処分を他人に委託することを義務付け（※）。
※ 違反に対しては、当該事業者に対し、期限を定めて、当該ポリ塩化ビフェニル廃棄物の処分その他必要な措置を講ずべきことを命ずることが可能。
- また、PCB 廃棄物処理基本計画においては、高濃度 PCB 廃棄物については、上記の政令で定める期限よりも前倒しで、地域毎や PCB 廃棄物の種類毎に処理期限を設定。
- こうした中で JESCO においては、PCB 廃棄物処理基本計画に定める計画的処理完了期限内の処理を達成するため、高濃度 PCB 廃棄物の保管事業者等に対して、JESCO への処分委託に先立つ登録を速やかに行っていただくよう営業活動（※）を実施しているところ。
※ 早期登録による処分料金の割引制度の導入、処分料金の分割払い制度の導入、意図的に登録を行わない者に対する処理料金の値上げの告知の検討等
- 都道府県市や JESCO の指摘によれば、PCB 特措法に基づく届出がなされている PCB 廃棄物のうち、JESCO への登録が未だなされていないものが相当数存在すると推測される。ただし、その正確な全体像は不明。
- PCB 特措法に基づく届出量と JESCO への登録量とを比較すると、表 4 のとおり、トランス類は届出量より登録量が約 3 千台少なく、コンデンサ類は届出量より登録量が約 9 千台少ない状況。届出量と登録量の差異は、ウ②に記載された届出量の正確性、意図的に登録を行わない者の存在によるものと考えられるが、正確な実態は不明。また、安定器については、大阪、豊田、東京事業の登録量が含まれていないことが主な要因。

表4 高濃度 PCB 廃棄物の JESCO への登録状況（平成 26 年 3 月現在）

PCB 処理事業名		トランス類	コンデンサ類	安定器
北九州	C：届出量合計 (表3 A+B)	380 台	9,995 台	339,029 個 ※719 トン
	D：登録量 (未処分量のみ)	249 台	6,500 台	506 トン
	E：(C-D)	131 台	3,495 台	213 トン
大阪	C：届出量合計 (表3 A+B)	907 台	26,484 台	909,229 個 ※1,928 トン
	D：登録量 (未処分量のみ)	515 台	21,111 台	0 トン
	E：(C-D)	392 台	5,373 台	1,928 トン
豊田	C：届出量合計 (表3 A+B)	1,358 台	19,302 台	770,598 個 ※1,634 トン
	D：登録量 (未処分量のみ)	800 台	17,649 台	0 トン
	E：(C-D)	558 台	1,653 台	1,634 トン
東京	C：届出量合計 (表3 A+B)	2,384 台	40,219 台	1,925,487 個 ※4,082 トン
	D：登録量 (未処分量のみ)	1,017 台	43,821 台	0 トン
	E：(C-D)	1,367 台	▲3,602 台	4,082 トン
北海道	C：届出量合計 (表3 A+B)	1,293 台	22,575 台	756,855 個 ※1,605 トン
	D：登録量 (未処分量のみ)	921 台	20,315 台	1,001 トン
	E：(C-D)	372 台	2,260 台	604 トン
合計	C：届出量合計 (表3 A+B)	6,322 台	118,575 台	4,701,198 個 ※9,967 トン
	D：登録量 (未処分量のみ)	3,502 台	109,396 台	1,507 トン
	E：(C-D)	2,820 台	9,179 台	8,460 トン

備考

- 1) トランス類は、高濃度に区分された高圧トランス（ネオントランスを除く。）、リアクトル、放電コイル、計器用変成器、整流器、誘導電圧調整器、ラジエーター等が含まれる。
- 2) コンデンサ類は、高濃度に区分された高圧コンデンサ、サージアブソーバー等が含まれる。
- 3) 安定器は、高濃度に区分された安定器が含まれる。
- 4) 低圧トランス及び低圧コンデンサのうち小型のもの、廃 PCB 等、感圧複写紙等上記以外の高濃度 PCB 廃棄物は本表には含まれていない。
- 5) 安定器の届出重量は推計値（※印）。

(JESCO への処分委託)

- PCB 廃棄物の保管事業者に対しては、都道府県市により、期限内処理に係る指導が一定程度なされているが、保管事業者以外の事業者（未届事業者や、使用中の PCB 使用製品保有者と思料される）に対する周知、指導の実施状況は依然として低い状況。

表5 アンケート調査による事業者への期限内処理の指導等実施状況
 (平成25年4月～平成26年10月の実施状況、調査対象113都道府県市、複数回答あり)

保管事業者の全てに対し実施した	55自治体
保管事業者の一部に対し実施した	50自治体
保管事業者以外の全ての事業者を実施した	8自治体
保管事業者以外の一部の事業者を実施した	24自治体
現時点では、実施していない	4自治体

- JESCOの指摘によると、登録を行った事業者のうち、一部の事業者は、処理費用の負担が大きいことを理由に、処分委託契約の締結を行っていない状況。
- アンケート調査によれば、保管中のPCB廃棄物が毎年数十件の紛失事案及びPCB廃棄物を一般の産業廃棄物として故意に又は誤って処分した事案等の不適正処理事案、毎年数件の不法投棄事案が現在も発生しており、このような廃棄物が適正に処分委託されていない状況。また、保管中のPCB漏えいなどの事故事案も年間数十件発生し、保管事業者の破産、死去、相続等に起因して処理が滞っている事案が顕在化している都道府県市も存在する状況。
- 中小企業者等の費用負担能力が小さい者における処分委託を促進するため、PCB廃棄物処理基金を国及び都道府県が協調して造成し、処分料金の70%を軽減。平成26年4月には、処理費用軽減対象者に「常時使用する従業員の数が100人以下の法人」及び「個人」を追加するとともに、特に費用負担能力が脆弱な「個人(ただし、個人事業主を除く。)」及び「破産している法人」について、処分料金の95%を軽減することとしたところ。
- JESCOにおいては、従前まで処分料金は一括支払いとしていたが、平成27年度(北九州事業地域は平成26年度)から中小企業者等について分割支払いを可能とする仕組みを導入。また、意図的に処理委託を行わない者に対して、処理料金が上がることを早期に告知し、計画的な処理委託を促進することについて、JESCOにおいて具体化を検討中。

(JESCOにおける処分の状況)

- JESCOにおいて、平成26年度に5事業所に係る長期保全計画を策定し、毎年度、PDCAサイクルの中で適宜見直すこととしたところ。また、過去に発生した全てのトラブルについて、5事業所における対応状況を再点検の上、トラブルの事業所間水平展開を継続的に実施。
- 環境省において、JESCOの処理施設の長期保全計画や定期点検の結果に基づく改造、点検及び補修に係る費用の一部を補助する事業を実施。
- JESCOにおける処理の進捗状況については、近年、処理施設がおおむね処理能力どおりの処理を行えており、実績が積み重なっているところ。具体的には、これまでのJESCOにおける処理実績を踏まえ、平成26年3月現在の届出量及

び登録量を勘案しつつ、平成 27 年 3 月現在の処理の進捗率を算出すると、全体として、トランス類 69%、コンデンサ類 68%、安定器 23%と推計される

ところ。

- また、基本計画に基づく JESCO における新たな事業地域を越えた広域的な処理については、今年度から処理が開始されているところ。ただし、処理の進捗状況等から、東京事業地域から北海道 PCB 処理事業所に搬入する安定器等・汚染物及び北海道事業地域から大阪 PCB 処理事業所に搬入する特殊コンデンサについては、平成 28 年度開始を視野に調整を行っているところ。

表 6 PCB 廃棄物の処理の進捗状況（平成 27 年 3 月末現在）

PCB 処理事業所		トランス類	コンデンサ類	安定器
北九州	処理量 (H27.3)	2,528 台	44,883 台	1,851 トン
	届出量 or 登録量 (H26.3)	381 台	10,100 台	771 トン
	搬入量 (H26.3)	2,401 台	39,561 台	1,356 トン
	進捗率	91%	90%	87%
大阪	処理量 (H27.3)	2,315 台	53,512 台	0 トン
	届出量 or 登録量 (H26.3)	907 台	26,719 台	1,928 トン
	搬入量 (H26.3)	2,209 台	47,845 台	0 トン
	進捗率	74%	72%	0%
豊田	処理量 (H27.3)	1,751 台	37,730 台	0 トン
	届出量 or 登録量 (H26.3)	1,358 台	20,230 台	1,634 トン
	搬入量 (H26.3)	1,658 台	32,450 台	0 トン
	進捗率	58%	72%	0%
東京	処理量 (H27.3)	2,745 台	35,068 台	0 トン
	届出量 or 登録量 (H26.3)	2,384 台	48,697 台	4,082 トン
	搬入量 (H26.3)	2,462 台	29,430 台	0 トン
	進捗率	57%	45%	0%
北海道 (室蘭)	処理量 (H27.3)	3,069 台	42,228 台	830 トン
	届出量 or 登録量 (H26.3)	1,295 台	24,012 台	1,623 トン
	搬入量 (H26.3)	2,903 台	35,458 台	288 トン
	進捗率	73%	71%	43%
合計	処理量 (H27.3)	12,408 台	213,421 台	2,680 トン
	届出量 or 登録量 (H26.3)	6,325 台	129,758 台	10,037 トン
	搬入量 (H26.3)	11,633 台	184,744 台	1,644 トン
	進捗率	69%	68%	23%

備考：

- 1) トランス類は、高圧トランス（ネオントランスを除く。）、リアクトル、放電コイル、計器用変成器、整流器、誘導電圧調整器、ラジエーター等が含まれる。
- 2) コンデンサ類は、高圧コンデンサ、サージアブソーバー等が含まれる。
- 3) 本表には、低圧トランス及び低圧コンデンサのうち小型のもの、廃 PCB 等、感圧複写紙等上記以外の高濃度 PCB 廃棄物は含まれていない。
- 4) 安定器の届出重量は推計値（※印）。
- 5) 安定器の処理量、搬入量にはドラム缶等の重量は含まない。
- 6) 処理量及び搬入量には試運転時の台数は含まない。

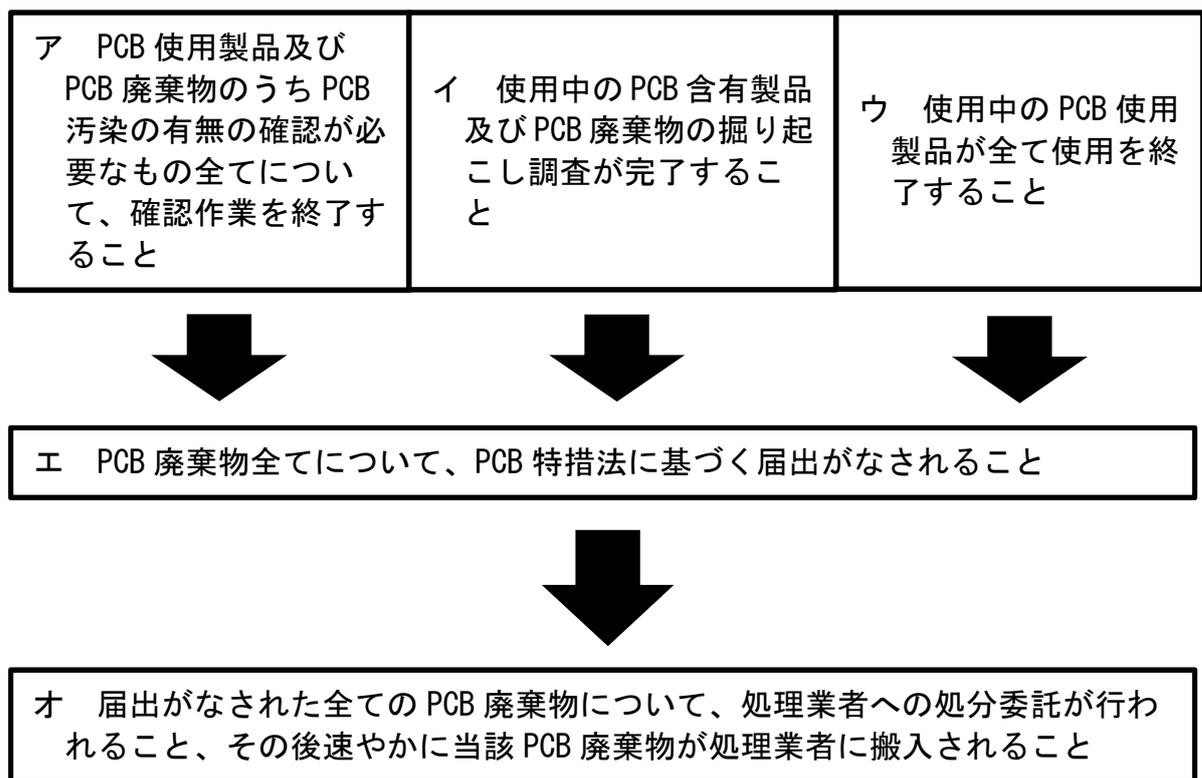
③ 今後の検討課題と対応の方向

- **JESCO への処分委託を促進するための方策の検討:**登録を処分委託手続の開始と捉え、処分費用を負担する準備ができていないために登録を忌避している事業者や、処分費用を負担する準備ができていないために処理委託を忌避している事業者があると都道府県市、JESCO から指摘を受けているところ。PCB 特措法においては、政令で定める期間内に（平成 38 年度末までに）、その PCB 廃棄物を自ら処分し、又は処分を他人に委託することを義務付け、義務違反については、必要な措置を命ずることができることとされている一方、PCB 廃棄物処理基本計画に基づく計画的処理完了期限内の処理については、そのような規定は設けられていないところ。
- **保管事業者の破産、死去、相続等に起因して処理が滞っている事案への対応の検討:**PCB 廃棄物を期限内に処分する法的な義務が存在する保管事業者が不明確になり、都道府県市の関係事業者に対する指導に支障が生じており、このような場合のグッドプラクティスの集積や都道府県市による代執行に対する支援策の検討が必要であると都道府県市から指摘を受けているところ。
- **処理施設の健全性を確保するための方策:**引き続き、処理施設の日常保全、定期点検を実施するとともに、長期保全計画に基づき、施設の適切な補修又は更新を確保することが必要。また、災害対策や万一のトラブルの発生に対しても被害の未然防止策等について柔軟に対応できるよう継続的な検討が必要。

3. 低濃度 PCB 廃棄物に係る基本計画達成の見通し

(1) 基本計画達成に向けたフォローアップ項目について

- 低濃度 PCB 廃棄物の処理完了期限は、PCB 廃棄物処理基本計画に定められた高濃度 PCB 廃棄物の処理期限よりも後に設定されており、PCB 特措法施行令に規定された平成 39 年 3 月 31 日が処理期限とされている。
- このため、処理期限が先に到来する高濃度 PCB 廃棄物の処理完了に向けたフォローアップを重点的に行うこととするが、低濃度 PCB 廃棄物についても処理期限内にその処理を終えなければならないという点では重要性に変わりはなく、その着実な処理に向けて以下の各項目それぞれについてフォローアップを行うことが必要。
- フォローアップに当たっては、PCB 特措法制定以降に微量 PCB 汚染廃電気機器等の問題が発覚したため、使用中のものが相当数あることが想定されること、低濃度 PCB 廃棄物の処理体制については整備の途上にあり、その充実・多様化を図ることが重要である点にも留意することが必要。



※ アについて、「PCB 汚染の有無の確認が必要なもの」には、本来 PCB に汚染されていないものが含まれる点に留意する必要がある。

(2) 基本計画達成に向けたフォローアップについて

ア PCB 使用製品及び PCB 廃棄物のうち PCB 汚染の有無の確認が必要なもの全てについて、確認作業を終了すること

【主なポイント】

- PCB 使用製品及び低濃度 PCB 廃棄物のうち、微量 PCB 汚染廃電気機器等については、PCB 汚染の有無を実際に分析しなければ確認できず、正確な使用量及び保管量を把握するための方策について検討することが必要。
- 使用中の電気機器のうち、封じ切り機器については、分析のために一部破壊等が伴い、分析の結果、PCB 汚染がなくとも使用を廃止しなければならないものがあることに留意が必要。

① PCB 廃棄物処理基本計画における主な記載内容

- 第 2 章第 4 節 3 微量ポリ塩化ビフェニル汚染廃電気機器等に関する情報提供等

微量のポリ塩化ビフェニルによって汚染された又はその可能性がある電気機器等を使用している事業者は、その使用を終え、電気工作物を廃止した場合には、電気機器等を製造した者及び一般社団法人日本電機工業会、一般社団法人日本電線工業会等の関係団体から提供されるポリ塩化ビフェニル汚染の可能性に関する情報に注意するとともに、必要に応じて、当該電気機器等を製造した者に対して、ポリ塩化ビフェニル汚染の可能性の有無について確認するものとする。また、当該電気機器等を製造した者からの情報により、当該電気機器等にポリ塩化ビフェニル汚染の可能性がある場合には、速やかに絶縁油中のポリ塩化ビフェニルの濃度を測定する等の適切な方法により、ポリ塩化ビフェニルにより汚染されているかどうかを確認するものとする。

- 第 2 章第 4 節 2 測定方法の確立

国は、絶縁油中のポリ塩化ビフェニルを短時間にかつ低廉な費用で測定できる方法の確立を図ることとする。

② これまでの進捗状況

- 環境省において、「絶縁油中の微量 PCB に関する簡易測定法マニュアル」及び「低濃度 PCB 含有廃棄物に関する測定方法」を策定し、測定方法を提示。
- PCB 廃棄物の処理に係る理解の増進のためのパンフレットを作成・頒布。同パンフレットにおいて、微量 PCB 汚染電気機器等の判別方法を記載。
- 低濃度 PCB 廃棄物のうち、微量 PCB 汚染廃電気機器等については、PCB 汚染の有無を実際に分析しなければ確認できないことから、低濃度 PCB 廃棄物に係る正確な使用量及び保管量は、現時点では不明。
- なお、基本計画においては、微量 PCB 汚染廃電気機器等の使用中を含めた推

計量として、柱上トランス以外の電気機器が約 120 万台、柱上トランスが約 146 万台、O F ケーブルが約 1,400 キロメートル存在すると推計。

③ 今後の検討課題と対応の方向

- **使用中の電気機器の PCB 汚染の有無の確認方策の検討** : PCB 汚染の有無を実際に分析する必要のある使用中の電気機器のうち、トランス類については、使用中であっても、封入された絶縁油を採油し、分析することができるが、絶縁油封じ切り機器であるコンデンサ類は、使用中の採油はできない構造となっており、使用を廃止しなければ分析は困難。また、本来 PCB 汚染のないコンデンサ類の使用の廃止と代替機器の購入まで生じるおそれがある。さらに、PCB 汚染が認められた場合、通常の産業廃棄物と異なり特別な管理を要することから、分析を忌避する事業者が存在することが考えられるとの指摘を、事業者から受けているところ。

イ 使用中の PCB 含有製品及び PCB 廃棄物の掘り起こし調査が完了すること

【主なポイント】

- 掘り起こし調査は、当面は、処理期間の短い高濃度 PCB 廃棄物等を中心に調査が進展すると見込まれるが、低濃度 PCB 廃棄物等については、排出事業者の実態を踏まえた方策について検討することが必要。

① PCB 廃棄物処理基本計画における主な記載内容

- 第 2 章第 3 節 2 (2) 都道府県市の取組
都道府県市は、必要な調査を行った上で、管内における未処理の使用製品やポリ塩化ビフェニル廃棄物を網羅的に把握することが必要である。このため、事業者に対して使用製品の保有状況を確認するとともに、保管事業者と関係のある事業者団体等を通じて情報収集に努めるものとする。これらの取組においては、国、中間貯蔵・環境安全事業株式会社、電気保安関係等の事業者等と協力して未処理事業者の一覧表を作成し、当該一覧表に掲載された事業者に対し、処理の時期を確認するものとする（再掲）
- 第 2 章第 3 節 2 (3) 国の取組
国は都道府県市と連携し、保管事業者及び使用製品を使用する事業者に対する計画的な処理の必要性を周知するとともに、使用中の使用製品やポリ塩化ビフェニル廃棄物の把握に努め、処理の時期の確認を行う（再掲）

② これまでの進捗状況

- 平成 26 年 8 月に、掘り起こし調査マニュアルを策定し、都道府県市に周知するとともに、これに係る担当者説明会を同年 8 月に開催。当該マニュアルについて、電気機器に係る低濃度 PCB 廃棄物の排出事業者については、高濃度 PCB 廃棄物とほぼ重複することから、当面実施される高濃度 PCB 廃棄物の掘り起こし調査の実施に併せて、低濃度 PCB 廃棄物の掘り起こしを進める方針。
- 2 (2) アのとおり、掘り起こし調査は、今後、実際には今年度以降、各自治体で本格化し、当面は、処理期間の短い高濃度 PCB 廃棄物を中心に調査が進展する見込み。

③ 今後の検討課題と対応の方向

2 (2) ア③に掲げた課題に加え、次の課題が存在。

- 低濃度 PCB 廃棄物の実態に即した掘り起こし調査方法の検討：低濃度 PCB 廃棄物については、電気機器以外のものもあり、このような廃棄物の排出事業者は、電気機器を設置する事業者を対象とする高濃度 PCB 廃棄物の掘り起こし調査の対象外。

ウ 使用中の PCB 使用製品が全て使用を終了すること

2 (2) イに加えて、以下のような検討課題が存在。

- **使用中の微量 PCB 使用製品の把握に係る対応方策の検討**：微量 PCB 使用製品は、機器ごとに分析を要すること、分析時に機器の停止や停電を要するなど運用上の制約から容易に対応できない場合があること、封じ切り機器に係る問題等特有の課題が存在。
- **使用中の PCB 使用製品の廃止に係る方策の検討**：微量 PCB 使用製品は、一般に高濃度 PCB 使用製品に比べて新しく、寿命を十分残した使用中の機器が多数存在することに配慮が必要。

エ PCB 廃棄物全てについて、PCB 特措法に基づく届出がなされること

【主なポイント】

- 低濃度 PCB 廃棄物の使用量、保管量の正確な全体像を把握するための方策について検討することが必要。

① PCB 廃棄物処理基本計画における主な記載内容

- 第 2 章第 1 節 4 地方公共団体の役割
都道府県市は、国とともに、保管事業者に対し、特別措置法に基づく届出及び期間内の処分に係る義務並びに廃棄物処理法に基づく適正な保管その他の義務に関し、周知徹底を図ることに努める。（再掲）
- 第 3 章第 1 節 1 全国のポリ塩化ビフェニル廃棄物の保管等状況の情報の収集、整理及び公開
国は、全国的なポリ塩化ビフェニル廃棄物の保管及び処分の状況について、国民、地方公共団体その他の関係者に広く情報提供するため、都道府県市に届出された保管及び処分の状況に関する情報を集約し、処分の進捗状況等を分かりやすく提示していくよう努める。（再掲）

② これまでの進捗状況

- 基本計画においては、微量 PCB 汚染廃電気機器等の使用中を含めた推計量として、柱上トランス以外の電気機器が約 120 万台、柱上トランスが約 146 万台、OF ケーブルが約 1,400 キロメートル存在すると推計。
- 平成 26 年 3 月末現在の PCB 特措法に基づく届出状況から、低濃度 PCB 廃棄物に区分されたもののうち、比較的量が多いものをまとめると表 7 のとおりとなるが、2（2）ウ②に記載された届出の正確性、イ②に記載された実際に分析しなければ低濃度 PCB 廃棄物であるかを確認できないことなどから、正確な数値ではなく、また、今後の掘り起こし調査の進展等によって増加するおそれがあり、正確な全体像は不明。

表 7 低濃度 PCB 廃棄物の届出状況（平成 26 年 3 月現在）

廃棄物の種類	保管量	使用量
高圧トランス	23,780 台	6,510 台
高圧コンデンサ	43,615 台	3,083 台
低圧トランス	21,215 台	1,006 台
低圧コンデンサ	963,371 台	18,226 台
柱上トランス	1,142,563 台	285,923 台
安定器	850,861 個	43,105 個
PCB を含む油	60,406 トン	75 トン
汚泥	18,772 トン	—
その他の機器等	458,566 台	42,745 台

③ 今後の検討課題と対応の方向

- 掘り起し調査の迅速かつ確実な実施：前述のとおり。

オ 届出がなされた全ての PCB 廃棄物について、処理業者への処分委託が行われること、その後速やかに当該 PCB 廃棄物が処理業者に搬入されること

【主なポイント】

- 低濃度 PCB 廃棄物の処理拠点は増加してきたが、処理の進捗は未だ初期段階。
- 無害化処理認定事業者の増加を図るとともに、課電自然循環洗浄法の対象範囲の拡大や昨年度から検討に着手している絶縁油の抜油後の筐体（容器）の安全かつ合理的な処理方策について検討することが必要。

① PCB 廃棄物処理基本計画における主な記載内容

- 第 2 章第 2 節 処理施設の整備その他の処理体制の確保に関する方針
微量ポリ塩化ビフェニル汚染廃電気機器等について、電力会社が自ら保管する柱上トランスについては自社処理施設を整備し処理を行ってきたことに加え、平成 21 年度から廃棄物処理法に基づく無害化処理認定制度による処理体制の確保が行われてきた。今後は、これらの取組に加え、廃棄物処理法に基づく都道府県市による特別管理産業廃棄物の処分業の許可制度も活用しながら、処理体制を確保することとする。
その他、ポリ塩化ビフェニル廃棄物であって、ポリ塩化ビフェニルによる汚染の程度が一定値以下のものについては、平成 24 年度から廃棄物処理法に基づく無害化処理認定制度の対象とされており、本制度を活用し、処理体制を確保することとする。
- 第 2 章第 4 節 1 処理体制の整備
微量ポリ塩化ビフェニル汚染廃電気機器等については、廃棄物処理法第 14 条の 4 又は第 15 条に基づき都道府県知事が特別管理産業廃棄物処理業の許可又は産業廃棄物処理施設の設置の許可を行うことに加えて、同法第 15 条の 4 の 4 に基づき環境大臣が無害化処理の認定を行うことにより、処理体制の整備を図ることとする。
また、国は、処理施設の円滑な整備、微量ポリ塩化ビフェニル汚染廃電気機器等の無害化処理技術の評価及び微量のポリ塩化ビフェニルの汚染状況の確認に対する支援を行うこととする。
さらに、微量ポリ塩化ビフェニル汚染廃電気機器等の処理が合理的に進むよう、使用中の使用製品に対する課電自然循環洗浄法等の適用の枠組みの早期構築について検討するとともに、絶縁油の抜油後の筐体について、安全かつ合理的な処理方策について検討を進めることとする。

② これまでの進捗状況

- 低濃度 PCB 廃棄物の処理体制については、環境大臣が認定する無害化処理認定事業者又は都道府県知事が許可する特別管理産業廃棄物処理業者において処理。
- 平成 27 年 7 月現在で、無害化処理認定事業者が 24 事業者、特別管理産業廃棄物処理業者が 2 業者。

- 微量 PCB 汚染廃電気機器等の抜油後の筐体（容器）については、筐体が金属製の大型機器であり、液体の絶縁油に比べ、大きさ、重量等の点から少ないため、その処理をできる無害処理認定事業者は、全体（24 事業者）の約半数の 14 事業者。その内訳は、焼却が 9 業者、移動困難機器の保管場所における洗浄が 4 業者、分解・洗浄が 1 業者。
- 無害化処理認定事業者及び特別管理産業廃棄物処理業者における処理の実績は表 8 のとおりであり、微量 PCB 汚染廃電気機器等の推計量や、平成 26 年 3 月現在の届出量と、処理実績の合計量を比較すると、低濃度 PCB 廃棄物の処理の進捗状況はまだ初期の段階。この理由として、処理体制の整備途上であったことに加え、費用負担を忌避する保管事業者が存在することが考えられるのではないかと、都道府県市や事業者から指摘されているところ。
- 一方、柱上トランスについては、平成 13 年から電力会社が自社処理を実施しており、平成 24 年度末時点で、電力会社保管量の約 7 割の処理が完了。柱上トランスに限った処理の進捗状況は終盤の段階。
- 平成 27 年 3 月に、使用中の微量 PCB 汚染廃電気機器等に係る課電自然循環洗浄法の適用を可能にする手順書を策定し、元油の PCB 濃度が 5 mg/kg 以下かつ銘板絶縁油量が 2,000L 以上の大型変圧器であって、一定の別系統部位を有するものに関係法令上の取扱いを明確化。対象範囲の拡大についても、今後検討を継続。
- 平成 26 年度より、絶縁油の抜油後の筐体（容器）の安全かつ合理的な処理方策の検討に着手。

表 8 低濃度 PCB 廃棄物の処理実績

【無害化処理認定事業者】

年度	廃棄物の種類				
	微量 PCB 絶縁油	廃電気機器類（トランス・コンデンサ等）	小型コンデンサ（20kg 以下）	その他 PCB 汚染物（ドラム缶を含む）	PCB 処理物
22	4,110 トン	0 台	0.76 トン	0.01 トン	0 トン
23	9,590 トン	4,564 台	2.72 トン	2.36 トン +2,117 本（ドラム缶）	0 トン
24	13,829 トン	7,440 台	2.99 トン	16.12 トン +3,621 本（ドラム缶）	0 トン
25	13,020 トン	12,446 台	0 トン	1,894 トン +2,697 本（ドラム缶）	156 トン
26	23,361 トン	19,370 台	0 トン	6,270 トン +9,667 本	160 トン
合計	63,910 トン	43,820 台	6.47 トン	8,182 トン +18,102 本（ドラム缶）	316 トン

【特別管理産業廃棄物処理業者】

年度	廃電気機器類 (トランス・コンデンサ・ その他機器)	その他 PCB 汚染物 (ドラム缶を含む)	廃 PCB 等
23	56,822 台	2 袋 (汚染物) + 2 本 (ドラム缶)	0 トン
24	90,139 台	39 個 (汚染物) + 316 本 (ドラム缶)	0 トン
25	107,761 台	268 個 (汚染物) + 425 本 (ドラム缶)	0 トン
26	45,043 台	863 個 (汚染物) + 74 本 (ドラム缶)	144 トン
合計	299,765 台	—	144 トン

③ 今後の検討課題と対応の方向

- **低濃度 PCB 廃棄物の処理体制の充実・多様化に向けた方策の検討**：無害化処理認定事業者の増加に向けた取組を進めるとともに、課電自然循環洗浄法の対象範囲の拡大に向けた検討を進め、また、絶縁油の抜油後の筐体（容器）の安全かつ合理的な処理方策について早期に結論を得ることが必要。さらに、処理施設の地域的偏在の解消等、保管事業者の処理ニーズに即応できる体制の確保も必要。
- **処理委託の促進方策の検討**：PCB 廃棄物の処理に係る費用は、PCB 廃棄物が通常の産業廃棄物と異なり特別な管理を要することから、費用負担を忌避する保管事業者が存在することが考えられるとの指摘を、都道府県市や事業者から受けているところ。